



花だより

鳥だより

ポロト案内舎 2018年 10月 82号



10月は冬に向けての準備が加速します。森が色づき、そして葉を落とします。今年の秋は、比較的穏やかに深まっていきました。急な冷え込みもなく、まだ、雪は降っていません。渡り鳥たちは例年並みにやって来ました。



そろそろ旅立ち



ポロト沼のタンチョウ家族は、沼を留守にする時間が増えてきました。朝早くに3羽で連れ立って飛び去ったり、夕方に戻ってきたり、沼以外の場所で多くの時間を過ごしています。ヒナ鳥は親に連れられ、沼以外の場所でいろいろな体験をしているようです。そろそろポロトを離れ、越冬地に向け旅立っていきます。戻ってくるのは3月。そのときは、親だけになっています。



冬鳥たち



オオハクチョウ 2羽が、11日にポロト沼にやって来ました。その後、十数羽の群れが、ポロトの上空を南に通過していくようになりました。オオハクチョウは、霧多布で越冬する鳥もいますが、その多くはもっと暖かい地方へ移動していきます。ハクチョウの群れがやって来ると、「もうすぐ冬が来るな」と、毎年思います。今年の飛来時期は、例年並みでした。



オオワシは、ポロト沼に23日にやって来ました。昨年は16日に確認しています。一週間遅れていますが、昨年が早すぎたのです。今年は例年並みの飛来時期になりました。

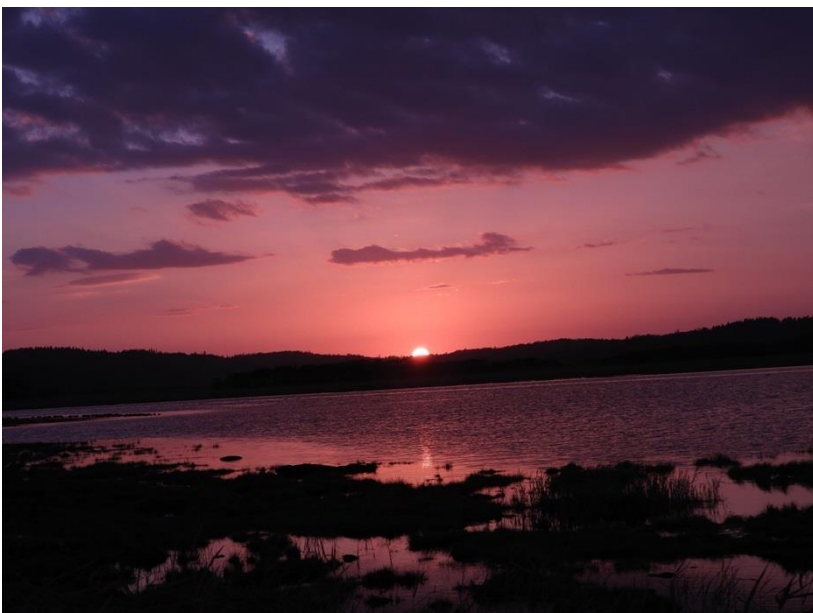
到着したオオワシはお腹がすいていたらしく、早速、大きなサケをむんずと捕まえ、岸に運んで食べていました。大きな足で押さえられたサケが、時々動いています。生きたサケを捕まえられるのはオオワシだけ。オジロワシにはない力強さがあります。オジロワシは死んで岸に打ちあがったサケを食べています。



サケを食べるオオワシの周りに、数羽のカラスが集まって来ました。オジロワシの若鳥もやって来ましたが、オオワシに一喝され、飛び去って行きました。



放射霧と色づく森と夕日



10月は美しい風景が目白押し。よく晴れた早朝には、湿原の奥から音もなく霧が忍び寄って来ます。地面を這うように進んできた霧は、湿原や森を覆い、朝日を浴びて金色に輝きます。幻想的な風景の誕生です。夏の海霧とは違い、放射冷却によって地表面の熱が奪われ生まれる放射霧です。

下旬には、紅葉が見ごろを迎えます。森のミズナラが黄色から赤に変わるころがピークです。この時期は一週間で森の雰囲気はすっかり変わります。緑の森が錦絵のようになり、そして、寒々とした裸の森に変わっていきます。日々刻々と変わる自然の変化に目を見張ってしまいます。

そして、秋は夕暮れ。ひと月の間に、日没の時刻が驚くほど早くなります。夕景のきれいな場所は霧多布湿原。この時期には、花の湿原はススキの白い穂で埋め尽くされています。日没の頃には、このススキの穂が黄金色に染められ、風に揺れています。湿原の奥に沈む夕日は、広い空と湿原を、オレンジや赤、紫に染め上げ、見る見るうちに沈んでいきます。その早いこと。暗くなった空を雁の群れが飛んで行きました。秋を感じるひと時です。



ピークを迎えています



「ピューーツ」、「ウィーール」、「ギーイーエ」。

いろいろに聞こえるオスジカの声。10月はエゾシカの恋が、最高潮を迎える時期です。早朝や夕方に森や湿原から、この哀愁を帯びた声が聞こえてきます。ひとつの声が、別の声を誘発することも珍しくありません。オスジカ同士が鳴きあって、声で戦っているのです。大きく、長く鳴ける声の持ち主ほど力のあるオス。弱いオスは鳴くのをやめます。

声だけで決着がつかない時は、大きなオスどうしが姿を現し、戦いを始めることがあります。この時期のオスは貫録十分。黒い体、太い首、先端が白く磨き上げられた大きな角。夏のオスジカは、赤い体色に鹿の子模様、先が丸くなった袋角。やさしい感じの姿ですが、秋にはすっかり戦闘モードに入っています。

太い首、黒い体には秘密があります。湿原や森を歩くと、地表面の草がはぎとられ、黒い泥や土が露出した、半畳ほどの地面を目にします。よく観察すると、大きな蹄の後や、丸い棒を押し付けたように見える、前足を折って座り込んだ跡がわかります。オスはここで黒い泥や土を体にこすり付けているのです。特に首の周りに塗り付け、首の毛を黒く、ごわごわにして、首が太く見えるようにしています。さらに、木に角をこすり付け、先端を白くとがらせています。オスが角磨ぎした木は、痛々しく傷だらけになっています。オスは恋のためには、努力を惜しまないのです。